2018-04-01　vol.179

実業家の品格を高めた「渋沢栄一」に学ぶ

渋沢栄一は、1840 年（天保 11 年）現在の埼玉県深谷市の農家に生まれました。子供頃から父親や従兄に、論語などを学び、「尊王攘夷」思想の影響を受けました。

その後、一橋慶喜に仕え、徳川昭武の随行でパリ万博を見学し、欧州の社会、経済・産業、政治、組織などに触れました。明治維新後に帰国し、静岡に商法会所を設立。その後明治政府に招かれ大蔵省に入りました。33 歳で大蔵省を辞し、民間人として生涯に約五百の企業の設立、約六百の福祉・教育関係の事業にも関わった“日本の近代資本主義の父”と称される明治の巨人の一人です。

「**商業は元来何に拠って立つかと云うと、即ち信用に拠ると言わねばならぬ。而してその信用と云うものは何に根拠を保つかと言ったら、即ち嘘を吐かぬと云うことが最も信用の根拠を為すと言わねばならぬ**」と渋沢は語っています。

「官尊民卑」と言われ、実業家の地位は低く、それを是正するには全体として豊かになることを考えなければならない、そのためには株式会社組織を根付かせ「合本」という考え方を主張しています。三菱や住友、三井のように、財閥を作らなかったことから、岩崎・住友等は男爵止まりであったが、殖産興業で公に尽くした渋沢は、子爵を賜ったといわれます。

関東大震災当日も兜町の事務所に出勤していました。**騒然とする市内に居ては危険と、息子らは郷里への避難を進言しますが「卑怯千万な！」と一喝し、すぐに渋沢は震災復興と、人心の復興に向けて動き出した**といいます。83 歳のときです。

一般的によく知られているのが『論語と算盤』『道徳経済合一説』『義利両全』などですが、渋沢のこのようなメッセージが際立ってくるのは、後半生、実業界引退後です。前半生は、「合本法」「合本組織」「官尊民卑の打破」「道理正しさ」などです。

国家がなかなか目を向けない教育分野に対して、教育こそが強い民間を担う人材を育成するという信念のもと、精力的に行動しました。エリート官僚と同格のエリート事業家を養成するために東京高等商業学校の大学昇格を粘り強く折衝し、商業教育に早くから乗り出しました。

渋沢は近代日本で最初の公的社会福祉施設を設立し、50 年以上にわたりその院長を務め続けたにもかかわらず、日本の社会事業史の研究においては、ほとんど取り上げられずに来ています。

志の高さ、ブレない判断基準、富と幸せを得る道、明治の名実業家に学ぼう！

今月のポイント

出でよ、新時代の渋沢栄一！